

小笠原諸島のいわゆる 林子平恩人説と竹島



塚本 孝
(元 東海大学法学部教授)

- 1 問題の所在
- 2 ペリー来航時の記録
- 3 『ペリー艦隊日本遠征記』に見える小笠原諸島 (1)
- 4 『ペリー艦隊日本遠征記』に見える小笠原諸島 (2)
- 5 海軍長官の報告書に見える小笠原諸島
- 6 結語

1 問題の所在

小笠原諸島は、本誌第8巻1号に時宜を得た記事が掲載されているように¹、1968年6月の返還協定（南方諸島及びその他の諸島に関する日本国とアメリカ合衆国との間の協定、1968.4.5）の発効により施政権が日本に返還されて50年を迎えた。本稿は、この機会に、すでに決着した話であるが“小笠原諸島領有に係る林子平恩人説を竹島領有権の文脈で援用しようとする問題”について改めて小括を試みるものである。

まず、林子平恩人説というのは、若松正志氏に従えば²、幕末の開国をめぐるペリーと江戸幕府との交渉において、ペリー側が小笠原諸島はアメリカ領であるとしてその承認を日本に迫り、日本側は非常に困ったが、林子平の『三国通覧図説』のフランス語版を提示した結果、アメリカは領有を断念し、小笠原諸島は日本領となったというものである。

林子平恩人説は、竹島領有権紛争において次のように援用される。

A. 林子平が1786年に出版した『三国通覧図説』中の三国通覧輿地路

1 高井智「2018年は小笠原諸島返還50周年」『島嶼研究ジャーナル』8-1 (2018.9) 128-137頁。
2 若松正志「小笠原諸島の領有と「林子平恩人説」の展開」(2006年度日本史研究会大会 近世史・近現代史合同部会報告要旨 2006.7.13) 『日本史研究』536 (2007.4) 102-104頁。

程全図³（朝鮮琉球蝦夷并ニカラフトカムサスカラツコ嶋〔等〕数国接壤ノ形勢ヲ見ル為ノ小図）は、本州と朝鮮半島間の日本海に、竹嶋と書いた島及びその直近東側に小島（島名が書かれていない）、さらに朝鮮半島近傍に今一つの無名の島を描き、これらを朝鮮半島と同じ黄色に彩色している。また竹嶋から西方向に「朝鮮ノ持之〔也〕」、南方向に「此嶋ヨリ隠州ヲ望〔ム〕／又朝鮮ヲモ見ル」と記している。

B. この三国通覧輿地路程全図の竹嶋又は同島直近東側の小島が今日日韓間で領有権紛争の対象になっている島（竹島、韓国名独島）であるという主張がある。すなわち18世紀後半に日本は竹島を朝鮮領であると認識していたというのである。

C. これに対し、当該絵図の島は鬱陵島と竹嶼（鬱陵島地先の小島）であると考えられるが、いずれにせよ、『三国通覧図説』は私人の著作物でありしかも著者林子平は“地理相違之絵図”を出版した等の廉で塾居を申し付けられているので、当該絵図は領有権に関わる史料ではない、との反論が行われる⁴。

D. 上記Cの反論に対し、日本政府がペリー来航時に小笠原諸島の帰属をめぐる三国通覧図説を提示し、この本に依拠して（同書は、無人島本名小笠原島、延宝三年島谷市左衛門らの実地調査などのことを記す。）小笠原諸島の領有を主張した以上、同書の地図は公的な性格を持ち、この地図を公式資料とした時点で竹島（独島）を朝鮮領と認めたと見るべきである⁵、という議論が行われる。

2 ペリー来航時の記録

前記Dの議論の当否を検討する場合、ペリーとの交渉において幕府が

3 鳥根県〔第1期〕竹島問題研究会最終報告書 絵図・地図編 (2007.3) に出雲市個人蔵絵図の画像が収録されている < https://www.pref.shimane.lg.jp/admin/pref/takeshima/web-takeshima/takeshima04/kenkyuukai_houkokusho/takeshima04_01/takeshima04d.data/5-1.pdf >。

4 船杉力修「絵図・地図からみる竹島(Ⅱ)」鳥根県〔第1期〕竹島問題研究会最終報告書 (2007) 149頁。 < https://www.pref.shimane.lg.jp/admin/pref/takeshima/web-takeshima/takeshima04/kenkyuukai_houkokusho/ >。

5 「独島＝朝鮮領と明記の地図、日米領土紛争で使用」朝鮮日報電子版 Chosun Online, 2008.5.3, 「日本、“独島は朝鮮領土”地図の提示で小笠原群島を獲得」中央日報電子版 Joins.com, 2008.5.3. なお、この報道に関する同年7月の質問に鳥根県 Web 竹島問題研究所が回答している。竹島問題への意見 > A. 江戸時代まで > 質問9 < <https://www.pref.shimane.lg.jp/admin/pref/takeshima/web-takeshima/takeshima08/iken-A.html> >。

どのような前後関係で林子平の三国通覧図説に言及したのかを知る必要がある。ところが、若松正志氏の研究によれば、そもそも“林子平恩人説”それ自体が史実ではないのである。若松氏は、平重道『林子平——その人と思想』仙台：宝文堂（1977）をはじめとする林子平の伝記に載るこの話が幕末外交や小笠原諸島を中心に叙述した文献に登場しないことから種々調査をされ、その結果、ペリーが幕府との交渉で小笠原諸島領有について議論したことを示す記録は国内外とも皆無で、林子平恩人説を時代をさかのぼって探してみると藤原相之助の書いた新聞連載小説「林子平」『河北新報』大正13（1924）年11月16日掲載分が“元ネタ”であることが確認できたという⁶。

当該新聞小説の連載第44回には⁷、次のような話が載っている。

……小笠原島に関しては、英米人はこれをボニン（無人の転訛か）又はアルゾビスポと唱へ、オランダ人はウーストと呼び、支那人は波寧（ボニン）と名づけ、日本の属領たることを認めてゐないので、天保元年英米人五人でハワイの男女十七人を連れて来て父島に上陸居住したが、日本ではそれを知らずにゐた、然し英国船も米国船もそれが解つてゐるので自国の属領だと称してゐたが嘉永六年に米国水師提督ペリリが来航した時、先づ小笠原島に入りピール、アイランド殖民政府といふものを置き、自国の領地だと称して日本政府にその確認を求めた。／幕府では大いに驚き、種々の記録を遽て、調査したがその結果として、文禄中豊太閤の命にて小笠原貞頼が南洋を採検した時にこれを発見したもので徳川時代に至り小笠原家に與へた事蹟があるので、これは西洋紀元千五百九十三年の頃既に日本の領地になつてゐると説明したけれどペリリは肯き入れなかつた／日本の領地なら何故に日本人が棲まないのか、よしや日本にそんな伝説があつたとしても、ヨーロッパ、アメリカ、支那などの諸国では無所属の島と認めてゐる、日本において世界の公認を覆へすだけの證據がなければ日本政府の抗議は成り立たないと鼻息が頗る荒い／幕府では頗る窮迫したが、偶仙台の林子平が天明中に著述した三国通覧図説に小笠原島の地図と説明が乗せてあり、

6 若松正志 前掲報告要旨（註2へ）。
7 『河北新報』1924.11.16（11.15夕刊）1面

それを独逸で翻訳公刊したものと聞き、辛うじてそれを求めてペリリに提示した……日本の島として世界に認められてゐることが拳證された、めに、ピールアイランド殖民地の主張が通らなくなつた……子平死して後六十年、小笠原島の米国に奪はれるのを防ぎ得たのは『三国通覧』の大功といはなければならない、……

ペリー来航に関係する資料は、日本側の記録である東京大学史料編纂所『大日本古文書——幕末外国関係』第5巻・第6巻のほか、米国側の主要な記録として、1855年に米国海軍長官が議会で提出した報告書

Message of the President of the United States, transmitting report of the Secretary of the Navy, in compliance with a resolution of the Senate of December 6, 1854, calling for correspondence, &c., relative to the naval expedition to Japan. January 31, 1855 – Read and referred to the Committee on Foreign Relations. February 2, 1855 – Ordered to be printed. (33d Congress, 2d Session, Ex. Doc. No.34)

及び1856年に議会文書として印刷され後に広く出版された『ペリー艦隊日本遠征記』⁸

Narrative of the expedition of an American squadron to the China Seas and Japan, performed in the years 1852, 1853, and 1854, under the command of Commodore M. C. Perry, United States Navy, by order of the Government of the United States, compiled from the original notes and journals of commodore Perry and his officers, at his request, and under his supervision, by Francis L. Hawks, D.D.L. L.D. with numerous illustrations. published by order of the Congress of the United States. Washington: Beverley Tucker, Senate Printer, 1856. (33d Congress, 2d Session, Ex. Doc. No.79)

の二つがある。——そのほか、ペリーの個人日記⁹及び中国語通事S・W・

8 邦訳：株式会社オフィス宮崎 翻訳・構成『ペリー艦隊日本遠征記』栄光教育文化研究所（1977）
9 *The Japan Expedition, 1852-1854; the personal journal of Commodore Matthew C. Perry, ed. by Roger Pineau, Washington DC: Smithsonian Institution Press, 1968.* 大熊良一氏によれば、

ウィリアムズの日誌¹⁰をはじめとする各種随員の日誌がある¹¹。

ペリーとの交渉で小笠原諸島の帰属が問題となり日本が林子平の三国通覧図説を示して米国の主張に反駁したという話は、上記主要記録中には見当たらない¹²。

3 『ペリー艦隊日本遠征記』に見える小笠原諸島(1)

ペリー来航の主要記録に“林子平恩人説”が見当たらないとしても、何かそのもとになる記述を見落としているかもしれない、また、前記以外の資料が存在することもあろう。今津浩一氏の調査によれば、海軍長官が議会に提出した報告書(上記33d Cong. 2d Sess. Ex. Doc. No.34, 以下「海軍長官報告書」という。)と公文書館の記録(*Letters received by the Secretary of the Navy from commanding officers of squadrons (“Squadron Letters”), 1841-1886, National Archives Microfilm Publication M89, Roll 8: East India Squadron vol.8*)を比べると、海軍長官報告書ではペリー艦隊から海軍省に送った報告の約半数が削除されているという¹³。そこで、角度を変えペリー自身が小笠

秘書官 Oliver Hazard Perry に毎夜口述筆記させたものであるという。大熊良一「ペリーの
小笠原諸島探検記」(『自由民主党』政策月報)1973.1.165頁。

10 *A Journal of the Perry expedition to Japan (1853-1854) by S. Wells Williams, first interpreter of the expedition, edited by his son F. W. Williams. in Transactions of the Asiatic Society of Japan, Vol. 37, Part 2, 1910. / The journal of S. Wells Williams: expedition to Japan with Commodore Perry (1853-1854)*, 宮澤真一・周国强・宮澤文雄転写整理, 郑州: 大象出版社, 2014. / 邦訳: サミュエル・ウェルズ・ウィリアムズ著, 洞富雄訳『ペリー日本遠征随行記』雄松堂書店, 1978 (新異国叢書8)

11 *With Commodore Perry to Japan: the journal of William Speiden Jr., 1852-1855*, ed. by J. A. Wolter, D. A. Ranzan, and J. J. McDonough, Annapolis: Naval Institute Press, [2013]. / *A scientist with Perry in Japan: the journal of Dr. James Morrow*, ed. by Allan B. Cole. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1947. 等々。いくつかの随行記は、次の叢書に含まれている: *The Perry mission to Japan, 1853-1854*, 8 volumes, introduction by W. G. Beasley, Richmond: Japan Library (Curzon Press Ltd), 2002. Vol.3: J. W. Spalding, *The Japanese Expedition*, reprint of 1857 ed.; Vol.4: Henry E. Graff, ed., *Bluejackets with Perry in Japan: A day-by-day account kept by Master Mate John R. C. Lewis and Cabin Boy William B. Allen*, reprint of 1952 ed.; Vol.5: *The Private Journal of John Glendy Sproston*, reprint of 1940 ed.; S. Wells Williams, *A Journal of the Perry Expedition to Japan 1853-1854*, reprint of 1910 ed.; Vol.7: Roger Pineau, *The Japan Expedition, 1853-1854. The Personal Journal of Commodore Matthew C. Perry*, reprint of 1968 ed. 上記註9の大熊良一氏による連載記事——(一)『政策月報』1972.12.112-126頁、(二)同1973.1.157-167頁、(三)同1973.2.161-171頁にも幾つかの随行記が翻訳紹介されている。

12 日本側の記録にないことにつき、大熊良一「小笠原諸島の開拓と中浜万次郎」『政策月報』1973.6.111頁。

13 今津浩一「ペリー提督の機密報告書——コンフィデンシャル・レポートと開国交渉の真実」横浜: ハイデンス, 2007, 118-119頁。

原諸島についてどのように考えていたかを確認する。

ペリー艦隊日本遠征記(*Narrative of the expedition ...* 上記33d Cong. 2d Sess. Ex. Doc. No.79, 以下「日本遠征記」という。)にあらわれる小笠原諸島に関する記述としては、まず、第10章に1853年第1回日本訪問の途次小笠原諸島に寄港した時のことを中心とした記事がある¹⁴。要点を箇条書きすれば、次のとおりである。

- ① ボニン (Bonin) 諸島は、北緯 26° 30' 及び 27° 45' の間に南北に伸びている。1827年に英国 Beechey 艦長が訪れ、北部諸島の大きい島をピール (Peel) 島、その島の港をロイド (Lloyd) 港、南部諸島をベイリー (Bailey) 諸島などと命名した。ただし、Beechey 艦長も南部の諸島は Coffin 氏の捕鯨船が1823年に訪れたことを認めている。
- ② ケンペル (Kämpfer) によれば¹⁵、1675年ころ日本の帆船が八丈島から漂着し、無人島であること、真水が豊富にあること、南方に特有の arrack tree が生え、土壌は肥沃で、多量の魚や4~6フィートに達するカニ(ペリーはウミガメの誤りであろうとする)が生息することを伝えた。
- ③ 他の記録によれば、日本人がボニン諸島を発見した年は、1675年よりはるか昔に遡る。英国人に発見の主張をする権利はない (the English have not a particle of claim to priority of discovery)。〔日本遠征記は、脚註の形でクラップロートによる仏訳版三国通覧図説の無人島の項¹⁶を英語で全文掲載している——名称 O-gasa-wara-sima の由来/距離、位置、気候、山川、土壌、産物、草木鳥魚等/1675年の長崎住人島谷市左衛門らによる渡航/林子平がオランダ人から無人島 Woest eiland 開発可能性の話聞いたことなど。〕
- ④ Coffin 船長は米国人であろう。ようやく1827年になって Beechey 艦長が訪れ、英国王の名において公式な所持の措置を採ることにより

14 日本遠征記 pp.197-214, 註8の邦訳書 Vol.1, 197-214頁 (ページが同じになるよう版組されている)。

15 ケンペル日本誌 Engelbert Kaempfer, *De beschryving van Japan...* は、*The History of Japan Together with a Description of the Kingdom of Siam 1690-92* として1727年に英語版が最初に出版された由である——大熊良一「小笠原諸島と林子平の『三国通覧図説』」『政策月報』1973.4.118頁。

16 *San kokf tsou ran to sets, ou, Aperçu général des trois Royaumes*, Traduit de l'original japonais-chinois [rédigé par Rinsifée, publié à Yedo en 1786] par Julius Heinrich Klaproth, Paris, 1832. pp.256-262, “Description des Iles Inhabitées.”